[教育方法一般]

子どもの学びを核とする博学連携組織の開発とコーディネーターの役割

－信濃川火焔街道博学連携プロジェクトの５年間－

金子　和宏*

1　研究の背景と位置づけ

博学連携とは「博物館と学校が望ましいかたちで連携・協力を図りながら，子どもたちの教育を進めていこうというものである。」[1] と北（2001）は定義している。はたして，博学連携の実情は北が定義したように，博物館と学校が連携協力を図りながら教育活動が進められているのであろうか。廣瀬（1996）によれば「博物館と学校との関係は主として博物館関係者によって議論されている。その多くは，博物館の学校教育支援という側面において論議されており，学校教育サイドからの提案や相互支援の視点での研究は少ない。」[2] と考察されている。また，大堀(1997)は「学校の教師は従来の展示見学一辺倒の博物館利用の考えから前進し，学校が博物館へどしどしと出かけて行き，博物館職員と学校教師が互いに役割を分担しあった博物館利用の方策をとる必要がある。」[3] と述べている。確かに，博物館側からのアプローチによる様々な実践や研究が報告され，アウトリーチやハンズオンといった，新しい博物館利用の方法も開発されている。そして，博物館側の様々な実践によって博学連携が広がっていることも事実である。しかし，研究の中で示されるカリキュラムには，博物館側の学校支援体制に合わせて，学習活動をはめ込んでいるかのような印象を受けるものが多い。子どもの学びを中核に据えるならば，子どもの実態に即して，学習のねらいを明確に設定したカリキュラムでなければならない。博物館との連携や利用は，カリキュラムの中で学習効果を上げるための手段として位置づけられるべきであろう。したがって，子どもが何を学ぶかを中核に据えながらカリキュラム開発を行う中で，子どもたちの学習効果を生むための手段として博物館に働きかけを行い，連携協力体制を確立していくプロセスがあって然るべきである。むしろ，博物館側はこのような学校側からの積極的なアプローチを期待しているのである。

学習指導要領の改訂作業を進めている中央教育審議会の小学校部会は，伝統と文化を尊重するとした教育基本法と学校教育法の改正を受け，総合学習で地域の文化伝統を教える必要性を強調した。今後，各学校で伝統文化を教材として活用していく動きが活発化していくであろう。そして，その過程において地域の博物館や公民館などの教育機関との連携がクローズアップされていくことは間違いない。金山ら（2000）は「文化財を活用しての教育普及活動を充実させることは，究極の文化財保護となるように，学校の教育活動を支援することは，博物館にとって博物館を支える市民の育成につながり，博物館そのものを活性化する契機となる。」[4] と述べている。これらのことからも，文化財を活用した博学連携組織の開発と実践的研究は，学校だけでなく博物館にとっても意義深い。さらに，文化伝統を重視する教育の流れから，その必要性は今後ますます大きくなると考える。

2　研究の目的

本研究の目的は，子どもの学びを核とした博学連携組織の開発を学校側からのアプローチによって実現し，継続した実践により，学校側への博物館利用の普及と博物館側との協力体制の確立を図るものとする。さらに，実践によって得られたデータより子どもたちへの教育効果について分析する。

3　実践の経過

(1)　博学連携組織の開発と活動の視点

当校が位置する十日町市は縄文時代の遺跡を数多く保有しており，国宝指定となった笹山遺跡の火焔型土器は全国的にも有名である。また，十日町市博物館では縄文時代を中心とする展示が施され，子どもを対象とした催しも積極

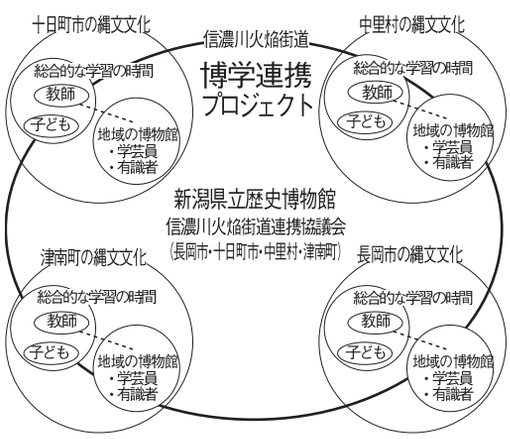
＊ 十日町市立下条小学校

的に開催されている。筆者は地域の価値ある学習資源を『縄文』ととらえ，平成12年度，13年度に「縄文」をテーマとした総合学習のカリキュラム開発に取り組み，十日町市博物館と連携し学習活動を展開した。しかし，長谷川（2000）が「博物館展示で描かれる地域とは紛れもなく自治体領域と一致しており，しかも超歴史的に提示されるために博物館を利用した地域学習においては，不変の領域観と住民系譜の連続性を所与のものと意識させることになろう。」[5] と指摘するように，子どもたちは地元の博物館から得た知識やイメージに囚われ，信濃川流域で栄えた縄文文化の広がりに目を向けたり，他地域と比較しながら自分の地域の縄文文化を客観的にとらえたりすることはできなかった。このことから，地元の博物館だけに連携を依存することで生じるマイナス要素の存在が浮かび上がった。このような状況を打開する糸口を，寺西（2000）の述べた「自分の地域での子どもの学びと他地域の学校の子どもとの交流やネットワークづくりを広げ，自らの文化を客観化していく視点を獲得していく場や機会をもつとよいであろう。」[6] から見いだすことができた。

津南町から長岡市にかけての信濃川中流域は，縄文時代の貴重な遺跡が数多く点在する場所である。流域の市町村には博物館や郷土資料館，遺跡公園などの施設が設置され，子ども向けの縄文体験講座などが活発に行われている。さらに，2002年８月には長岡市，十日町市，旧中里村，津南町が地域振興や広域観光の推進を目的として，信濃川火焔街道連携協議会を設立している。このように，「縄文」は信濃川中流域共通の学習資源であり，地域資源ということができる。この「縄文」という学習資源と，信濃川火焔街道連携協議会という流域市町村のつながりを活用し，信濃川中流域の学校と博物館が互いに連携し「縄文」をテーマに学習活動を展開すれば，各地域の保有する遺跡や博物館などの施設，学芸員や教員などの人材を市町村の枠を越えて共同で利用することが可能となり，効果的な指導法や最新の研究成果などの様々な情報を共有することができるようになると考えたのである。そこで，信濃川中流域の市町村にそれぞれ博学連携のつながりをつくり，それらを結びつけていく広域の博学連携交流ネットワークを構想した。（図１）これを「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」と名付け2002年にプロジェクトの組織づくりを行った。（表１）

【表１】博学連携プロジェクト構成機関と活動内容

	連携機関	活動内容
博物館及び学芸員	新潟県立歴史博物館 長岡市立科学博物館 十日町市博物館 中里村生涯学習課 津南町生涯学習課	担当教諭と連携し学習計画を立案する 地域の遺跡や文化財の説明 体験活動のコーディネイト 交流学習のアシスト 調べ学習等のサポート
小学校	長岡市立関原小学校 十日町市立下条小学校 中里町立貝野小学校 津南町立津南小学校	担当学芸員との学習計画を立案する 総合的な学習の指導 子どもたちの見取りと評価
コーディネーター	新潟県立歴史博物館研究員 上越市立春日小学校教諭	連携実践の企画運営 関係機関との連携調整 各地区の学習活動のファシリテート 実践の評価と反省
資金源	信濃川火焔街道連携協議会	活動資金の提供
研究協力	國學院大学小林教授 上越教育大学藤岡教授	プロジェクトへの指導助言 集合学習における子どもたちの指導



【図１】博学連携プロジェクトの図式

プロジェクト組織の編成にあたっては，「縄文・火焔街道を通しての連携実践企画書」を制作し，各機関に連携を要請してまわった。その中に盛り込んだ活動の視点は以下の３点である。

①文化財を活用した学習カリキュラムづくりを通して，新しい博学連携の在り方を提案する。
②学芸員と教員でつくるネットワークを活用して，交流学習の機会や学びのフィールドを提供する。
③信濃川流域文化の研究を通じて，地域間連携の絆を深める。

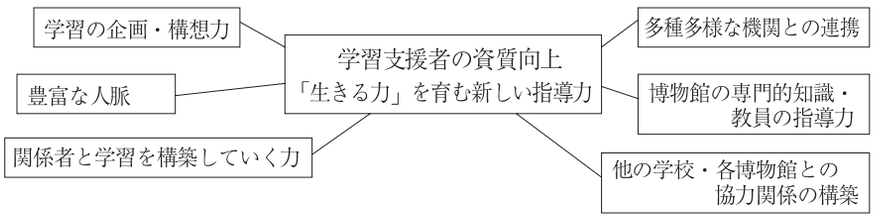
また，実践の効果として期待できる視点を，「子どもたちの学びの視点」と「学習支援者の資質向上に与える効果の視点」の２点を挙げ以下に図示する。「子どもたちの学びの視点」（図２）では，プロジェクトによる学びの獲得が郷土の理解や愛情の深まりにつながり，自己の生き方に生かされていくことを表した。

・縄文文化を共通テーマとして学びを交流する。
・縄文文化が信濃川中流域に広がる一大文化圏であったことを知る。
・多くの資料や専門的知識に触れる，豊かな学習活動を展開する。
・人との出会い，多くの感動を得る。
・自らの学びから，自己の生き方を考える。

縄文文化を郷土の誇れる文化としてとらえ，過去と現在をつなげて，未来の自分の生き方や社会に対して主張できるようになる。

【図２】子どもたちの学びの視点

「学習支援者の資質向上に与える効果の視点」（図３）では，教員と学芸員を共に学習支援者ととらえ，プロジェクトによって獲得されることが期待できる力を表し，学習支援者の指導力や資質の向上につながることを図示した。



【図３】学習支援者の資質向上に与える効果の視点

⑵　活動の実際

プロジェクトでは，連携各校のカリキュラムを最大限に尊重し，博物館と学校の連携や地域間の交流をコーディネイトしている。４月初旬には担当者会議を開き，各校の教員と担当学芸員が話し合いながら地域や学校の実態に合わせて年間の指導計画を構想していく。江口（2005）はプロジェクトの学習活動全体を「追求課題設定期」「共有体験活動期」「交流学習と情報発信活動期」の３つに分け，津南小学校で行われたプロジェクトの実践を報告している。[7]「追求課題設定期」は，博物館の見学活動や学芸員による出前授業等によって自己の追求課題を明確にしていく時期であり，「共有体験活動期」には，学芸員や学習ボランティアらと連携して，様々な体験活動が展開される。竪穴式住居の復元，地域の公民館と連携した土器作り，地域の遺跡を調査する発掘体験等，様々な体験活動が実践されている。このようにプロジェクトに参加する学校は，それぞれ学芸員と教員が連携し合い，学校独自の学習活動を展開していくのである。さらに，各校での活動をプロジェクトとして結びつけ，互いに刺激し合い，高め合う時期が「交流学習と情報発信活動期」となる。信濃川中流域に広がる連携各校が集まって繰り広げる「交流学習会」「子ども縄文研究展」「縄文子どもフォーラム」の活動内容について以下に記し，学習支援者や子どもの意識の高まりについても考察を加える。

①　交流学習会

交流学習はプロジェクトに参加する子どもたちが初めて顔を合わせる機会として，毎年６月下旬に実施している。全体会では，学校紹介や今まで学校で取り組んだ追求活動について，各校が工夫を凝らして発表し合う。また，グループ活動では，各個人の研究の状況や悩みなどについて意見を交換し合う。さらに，開催地の博物館や遺跡などを学芸員の案内で見学している。

【写真１】馬高遺跡見学

平成15年度は，発掘中の馬高遺跡に入り，発掘作業や柱穴の様子を体験的に学習した。（写真１）平成18年度は女子美術大学の眞田岳彦氏から，大地の芸術祭で十日町市博物館前に展示するアート作品の共同制作を依頼された。「越後の布」プロジェクトと題して行われた制作活動では，眞田氏の指導のもと，子どもたちが，25年先の自分に贈る言葉や夢を奉納幡にデザインした。完成した幡は交流学習会でそれぞれが発表した。（写真２）

【写真２】自分の幡の発表

馬高遺跡での体験学習や大地の芸術祭への参加など，特定の地域で行われた調査や催しを，連携地区全体の学習材として活用できたことは，プロジェクトが文化財や人材の活用範囲を広げ，価値ある体験学習へと結びつけたといえる。また，交流会の反省に「他校の取り組みを知ることができ刺激になった。」「追求の視点や目標をもつことができた。」「他地域にも縄文文化があることに気付くことができた。」などの内容が毎年見られることから，他地域の子どもたちとの交流が刺激や意欲となり，縄文文化を客観的にとらえようとする視点や自己目標の獲得につながっていることが見て取れる。

教員や学芸員からは以下のような感想が寄せられている。

この計画について始めは外部との連絡や打ち合わせが大変だなと思いました。でも，子どもの成長や学びのきっかけになればと頑張ってきました。どちらかといえば義務感みたいなものだったのかもしれません。しかし，少しずつ活動が進むうちに自分自身が博学連携プロジェクトのみなさんと同じ目的をもって活動してるんだなという充実感や責任感を感じるようになりました。私にとって大きな収穫になりそうです。（貝野小：教員）
文化財の仕事はただ調査や収集することだけと考えられているが，いかに地域に教育普及し還元するかが大事で，その１つとして地域に住む子どもたちにどのようにして学んでもらうかが問題であった。今回は担当する小学校との学習しかできていないが，市内全体での普及が目標である。子どもたちとも仲良くなれたことは非常によかった。全体的に全ての活動が自分の仕事にプラスになったと感じられる。（十日町市：学芸員）

このように，交流会によって教員や学芸員の連携の意識が高まっている。この意識の高まりは，職種を越えて互いを尊重し合う意識に発展していく。プロジェクトを複数年経験した学芸員と教員は，子どもたちの学びのとらえや連携に対する考え方が次第に一致してくることが分かってきている。

【写真３】番組に出演する子

② 子ども縄文研究展

連携各校の学習成果や子どもたちの作品を一堂に展示し，広く一般に公開している。平成15年度当初は十日町市博物館での展示を計画していたが，プロジェクトの活動が軌道に乗ると，県立歴史博物館からも会場提供の申し入れがあり，両館で時期をずらして開催することとした。さらに，平成16年度からは津南町農と縄文の体験実習館でも開催できることとなり，信濃川上流から下流に向かって３館を巡回する大がかりな展覧会に成長した。入場は全ての館において無料とし，多くの地域住民や学校が見学に訪れている。現在では，各博物館の年間計画に開催が位置づけられている。また，新聞やテレビ，博物館関係の雑誌等に取り上げられるようになり，徐々に知名度が高まっている。（写真３）この展覧会は，子どもたちの学習成果を発表する場として有効であると同時に学校の説明責任を果たす機会にもなっている。また，博物館側からも普及活動の発信と博物館の有効利用に活用され，入館者の獲得につながっている。このように，子どもたちの学習に多地域の博物館が共同利用され，学校と博物館の両者に効果をもたらしている。

③ 縄文子どもフォーラム

【写真４】パネルディスカッション

プロジェクトの集大成として位置づけ，毎年11月中旬に実施している。各校は，ある種のライバル意識をいだきながらも，フォーラムを目標に学習の成果をまとめ，発表練習や作品の準備を整える。当日の活動内容は「パネルディスカッション」「ポスターセッション」「博物館・遺跡見学」の３つを柱に構成している。

パネルディスカッションでは，各学校の代表者が，「縄文」をテーマに学んできたことを自分のメッセージとして発表し合う。参加者全員で意見を交換し合いながら考えを深めていく。（写真４）教員や各地区の学芸員に加えて，國學院大学の小林達雄氏や上越教育大学の藤岡達也氏も参加し，考古学や教育学の立場から子どもたちを指導している。

【写真５】ポスターセッション

ポスターセッションでは，各自の研究成果を発表し合う。（写真５）子どもたちの発表には，火起こしの実演や土器の文様を拓本に写し取るワークショップなど，体験的な発表を盛り込む工夫も見られる。説明を受ける側はメモをとりながら聞き，発表者に質問をしたり互いの苦労を紹介し合ったりする姿が見られている。また，教員や学芸員，大学教授らも参加し，子どもたちへの助言や励ましを行っている。

５年目を迎える実践の中で，中越地震や市町村合併など様々な状況を経験しながらも，フォーラムを継続することができている。中越地震直後に行われたフォーラムの感想を新潟県立歴史博物館学芸員は以下のように記している。

> 平成16年10月23日夕刻，新潟県中越地方を最大震度７の地震が襲った。各地に被害が及んだ中で，この火焔街道にあたる地域は特に甚大な被災地となった。連携地域を結ぶ道路は寸断し，博物館や学校も大きな被害を受けた。一時休館・休校の状態に追い込まれたのである。発生直後は，子どもフォーラムはもちろん，学習展覧会の実施についても中止せざるを得ないのか？との思いが頭を駆け巡った。しかし，震災で全てを断念してしまっては，子どもたちが今まで組み立ててきた学習の成果までも崩れてしまうのでは，と思い悩んだ。そんな時，津南小がフォーラムの実施を望む声を上げた。すぐに参加希望校を募ったところ，貝野小と中条小が参加の意志を掲げ，３校でフォーラムを開催することとなったのである。被災により参加できない学校があったことは残念ではあったが，子どもフォーラムの実施にこぎつけたことは，何かに救われたような思いであった。（中略）子どもたちに感想を求めると，やはり力強いメッセージを聞くことができた。中越地震なんかに負けないぞ！というメッセージもあった。こんな時だからこそ，参加した子どもたちは１つにまとまれたような気がするのも確かである（それは関わった学芸員や先生が一様に言っていたことであった）。
>
> とにかく楽しく，子どもたちの明るい声にパワーをもらった一日であった。そのため最後の挨拶では「とにかくうれしくて，楽しくてしょうがなかった，みんなありがとう。」そんな気持ちを子どもたちに素直に返して終わりとしたのであった。この縄文子どもフォーラムは子どもたちのためにあると共に，我々大人たちのためにもある，と思ったのだった。
>
> （新潟県立歴史博物館：学芸員）

この記述からも分かるように，フォーラムの開催を通してプロジェクト関係者の絆が強くなり，教員や学芸員の立場を越えて，子どもたちへの支援に対する意識が高まっていった。学芸員と教員が単なる連携の枠組みを越え，プロジェクトとして一つになった場面，いわゆる「博学融合」の場面ととらえることができる。

4　研究の成果と課題（子どもへの学びの効果と持続性の視点から）

実践開始以来継続して，プロジェクトに参加した全ての子どもたちに対して，事前と事後の２回アンケート調査を実施し，結果の分析を行っている。それぞれの年度において多少のばらつきは見られるが，毎年ほぼ同様の成果が見られている。その成果を分類整理すると以下の４点に集約することができる。

（ア）他地域の縄文文化にも目を向けながら学びを深めることができた。
（イ）自己の学びの達成感や成就感を高め，自己の生き方へ思考を展開させることができた。
（ウ）地域の歴史や文化への興味関心を持続させ，愛情や誇りをはぐくむことができた。
（エ）博物館への興味関心を持続させ，博物館利用や展示への意識を高めることができた。

本論では，上記の(ア)(イ)について，その具体的な姿を子どもたちの作文から明らかにし，(ウ)(エ)については，プロジェクトを経験した中学生への，アンケート調査の結果を分析することにより，効果の持続について考察する。

⑴　成果（交流ネットワークがもたらした学びの効果）

プロジェクトの学習効果を子どもたちの具体的な姿として示すため，子どもたちが追求活動のまとめとして書いた作文の中から，年度や地域の異なる子どもの作品を抽出し，以下に示す。

（前略）私はこの学習を通して，今の時代の人々も縄文人の心を見習い，平和で豊かな世界をつくっていくべきだと改めて感じた。毎日のように人々の命がなくなっていく世界より，１つの命でも大切にする，そして，全ての人が幸せになれる，そんな世界の方がよいであろう。もしこのまま時間が過ぎていけば人が人を信じない，そんな未来が来るであろう。大事なのはそうなる前に縄文人の心を取り戻すことである。もしかしたら「縄文人など豊かではない。人々も仲など良くなかったのだ！」と私と正反対の考えをもっている人がいるのかもしれない。だが，私は信じているのだ。縄文時代は絶対に今よりも平和だったと。心は豊かであったと。本当の姿がどんなであっても，私は信じているのだ。これからも信じて生きていくのだ。それは，いつか私が想像する縄文時代が来ることを心から願っているからである。(後略)
(平成15年度　津南小学校：Ｙ子)

縄文時代の人たちは生きるために知恵を出し合って，教え合ってやってきたと思います。私は，クラスのみんなと竪穴住居をつくってみてこのように感じました。(中略) 縄文時代の生活は何でも自分たちでつくり出さなければならず，とても大変だったと思います。それでも，きっと楽しかったと思います。なぜなら，私たちもとても楽しく住居づくりを進めることができたからです。苦労はたくさんありましたが，だんだんと家の形になっていくとうれしくてうれしくて，つくるのが楽しくなっていきました。きっと縄文時代の人も自分にあった仕事をして，助け合い楽しく生活していたのではないかと思います。人間はお互いに助け合いをしてきたから縄文時代から今まで時代がつながったんだと思います。考えることの大切さ，人と助け合うことの大切さを縄文人に教えてもらったような気がしました。　(平成16年度　貝野小学校：Ａ子)

（前略）ぼくは，始め現代の生活の方が絶対によいと考えていました。しかし，この学習を通して縄文時代の生活に魅力を感じるようになりました。当然，現代の生活を全て投げ捨てて，縄文時代の生活をすることはできません。しかし，様々な発明と工夫で生活を切り開いてきた縄文人の生き方に感動したのです。
ぼくは，つらいことや苦しいことから逃げたりすることが何度かありました。でも，縄文人のあきらめない心が生活を支えてきたことに気付き，少しずつ気持ちが変わっていきました。そして，この学習のまとめとして次の２つのことを決意しました。自分の生活に必要なことは，つらいことでも立ち向かいあきらめずにやりとげること。自然環境を守るために自分にできることは，めんどうなことでも実行すること。この２つのことを，縄文人にちかいたいと思います。
(平成17年度　下条小学校：Ｋ男)

これらの作文からも分かるように，子どもたちは自己の学びの達成感や成就感を高め，自己の生き方へ思考を展開させている。子どもたちの作文からキーワードを抽出すると，「自然環境保護と科学の共存」「共生や協力・社会環境の改善」「家族愛・郷土愛など心の豊かさ」「その他」に整理することがきた。このキーワードは，それぞれの年度の全ての学校に共通している。さらに，体験から得た学びを自らの生き方に生かそうとする視点や他者への発信を意識している点などの共通点を見いだすことができた。これは，「縄文」を共通のテーマに，多地域の子どもたちが互いの縄文文化を交流し合いながら，各自の課題を追求してきた結果の現れであり，子どもの学びを核とした博学連携交流ネットワークが継続して機能していることを物語っている。

⑵　課題（効果の持続から浮かび上がる継続の必要性）

本実践で獲得された地域の歴史文化や博物館への興味関心，縄文時代の正しい認識が実践から年月が経過しても保持されるのかを検討する。調査には十日町市立下条中学校の１年生から３年生に彼らが実践当時に行った事後アンケートと同じアンケートを実施し，それぞれの結果を比較する。分析にあたっては，経過した年ごとに小学生当時の結果と現在の結果を比較した度数分布表を作製し，χ^2検定を行った。検定の結果，人数の偏りが有意であったものを残差分析した。アンケートの設問を「博物館利用への関心」「博物館を学習に活用しようとする意識」「地域の歴史文化への興味関心や敬愛」「文化財の保護と活用」のカテゴリーに分類整理し，度数分布と残差分析をまとめ，表２に示した。

【表２】実践から経過年ごとの度数分布と残差分析

			平成17年からの１年後の変化				平成16年からの２年後の変化				平成15年からの３年後の変化			
			度数分布（人）		残差分析		度数分布（人）		残差分析		度数分布（人）		残差分析	
カテゴリー	設問番号	選択分類	小６	中１	小６	中１	小６	中２	小６	中２	小６	中３	小６	中３
博物館利用への関心	設問３	思わない	11	17	ns		34	41	-1.728^{+}	1.728^{+}	21	24	-2.103*	2.103*
		思う	22	16			14	7	1.728^{+}	-1.728^{+}	13	4	2.103*	-2.103*
	設問４	思わない	1	3	ns		11	20	-1.964*	1.964*	3	7	-1.723^{+}	1.723^{+}
		思う	32	30			37	28	1.964*	-1.964*	31	21	1.723^{+}	-1.723^{+}
	設問５	思わない	14	22	-1.977*	1.977*	36	43	-1.871^{+}	1.871^{+}	20	23	-1.982*	1.982*
		思う	19	11	1.977*	-1.977*	12	5	1.871^{+}	-1.871^{+}	14	5	1.982*	-1.982*
博物館の学習利用価値	設問６	思わない	1	1	ns		11	16	ns		2	7	-2.126*	2.126*
		思う	32	32			37	32			32	21	2.126*	-2.126*
	設問７	思わない	6	11	ns		26	30	ns		12	15	ns	
		思う	27	22			22	18			22	13		
	設問８	思わない	6	11	ns		31	39	-1.837^{+}	1.837^{+}	5	21	-4.787**	4.787**
		思う	27	22			17	9	1.837^{+}	-1.837^{+}	29	7	4.787**	-4.787**
地域の歴史文化への興味や敬愛	設問28	思わない	6	13	-1.903^{+}	1.903^{+}	27	28	ns		7	14	-2.509*	2.509*
		思う	27	20	1.903^{+}	-1.903^{+}	21	20			28	14	2.509*	-2.509*
	設問29	思わない	6	15	-2.378*	2.378*	28	27	ns		8	17	-3.051**	3.051**
		思う	27	18	2.378*	-2.378*	20	21			27	11	3.051**	-3.051**
	設問31	思わない	3	9	-1.914^{+}	1.914^{+}	19	23	ns		5	14	-3.069**	3.069**
		思う	30	24	1.914^{+}	-1.914^{+}	29	25			30	14	3.069**	-3.069**
文化財の保護と活用	設問９	思わない	1	4	ns		6	13	-1.793^{+}	1.793^{+}	2	7	-2.126*	2.126*
		思う	32	29			42	35	1.793^{+}	-1.793^{+}	32	21	2.126*	-2.126*
	設問32	思わない	5	6	ns		16	25	-1.856^{+}	1.856^{+}	7	15	-2.777**	2.777**
		思う	28	27			32	23	1.856^{+}	-1.856^{+}	28	13	2.777**	-2.777**
縄文時代の認識	設問39	誤答	3	3	ns		7	3	ns		3	2	ns	
		正答	23	24			28	23			26	11		

（$^{+}p<.10$ $*p<.05$ $**p<.01$）

実践直後と実践から１年後の比較では，８つの設問で両者の人数の偏りが有意ではなかった。しかし，４つの設問で思うと回答する子の人数の偏りがマイナスに有意となり，実践から１年で，すでに地域の歴史文化や博物館への興味関心が失われ始めていることが明らかとなった。中学２年生では，この傾向がさらに強くなり，有意ではない設問は６問に減少する。中学３年生に至っては，有意ではない設問は２問に減少する。人数の偏りがマイナスに有意な設問においては，高い有意水準を示す結果となった。このことから，博物館への興味関心や地域の歴史や文化への興味関心は年月が経過すると共に失われていく傾向にあることが分かった。しかし，設問７「博物館の人から勉強を教わりたいですか。」や設問39「縄文時代の人々にどのようなイメージをもっていますか。」の回答者数の偏りは，どの学年においても有意ではなく，学芸員との学びの経験や学習で得た縄文時代の正しい認識を小学生から維持し続けていることが分かった。

これらのことから，地域の歴史や文化への興味・関心をもち，自ら博物館を積極的に活用する子どもたちを育てていくためには，博物館と連携しながら，地域の歴史や文化を学ぶ学習活動を継続していく必要があるといえよう。

５　まとめ

学校側からのアプローチによる博学連携組織の開発は「信濃川火焔街道博学連携プロジェクト」として具現化することができた。特に、博物館と学校の単一連携にとどまらず，縄文文化の広がりを受けて信濃川中流域の複数の博物館と学校が連携し合う交流ネットワークにまで発展させることができたことは大きな成果であったといえよう。また，子どもの学びを中核に据えて活動を進めることで，教員と学芸員の共通理解が深まり，互いの専門性を発揮し合うことで，子どもたちに質の高い指導が提供できたと考える。さらに，プロジェクトを経験した教員の多くが，プロジェクトを離れた後も，学芸員との関係を維持し，教育活動に博物館や学芸員を積極的に活用していることから，博物館利用の普及は，プロジェクトを経験した教員によって，着実に進んでいくのではないだろうか。

本実践を通して『つながり』の大切さを実感してきた。学校，地域，人材，博物館を始めとする社会教育施設，学習資源等，これらをいかに接続し，有機的に機能させていくかがコーディネーターの重要な役割となる。今後もプロジェクトを継続させながら，さらに多くの学校が博物館と連携し，地域の歴史文化を学んでいけるよう，新たな仕組みを開発していきたい。

引用文献・参考文献

１）北　俊夫　『博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり』明治図書，2001，P12

２）廣瀬隆人　『学校教育と「融合」する博物館活動』丹青社，季刊ミュージアム・データNumber35，1996.12

３）大堀　哲　『教師のための博物館の効果的利用法』東京堂出版，1997，P63

４）金山喜昭編著　『学ぶ心を育てる博物館』UMBOOKS，2000，P3

５）長谷川賢二　『公立博物館の展示と歴史学研究』歴史科学協議会「歴史評論598」，2000.2.

６）寺西和子　『総合的学習の理論とカリキュラムづくり』明治図書，2000，P79

７）江口正洋　『博学連携による学校の枠組みを超えた学びの広がりについて』教育実践研究第15集，2005，P211-P216